

Ⅲ 自閉症の特性に応じた地域生活支援プログラムの開発

1. 自閉症を併せ有する幼児児童生徒への支援 ～地域生活で必要なこと～

Ⅲ章では、本研究の一年目（平成 15 年度）の計画に挙げた「自閉症を併せ有する幼児児童生徒の特性に応じた地域生活支援プログラム」についての報告である。熟考の結果、保護者向けのテキストとして、以下のような資料を作成した。

「自閉症のある子どもたちの豊かな生活の実現のために」

(1) 多くの子どもたちが通っている全国の盲・聾・養護学校の現状

平成 16 年 7 月に全国の盲・聾・養護学校に対し、郵送によるアンケート調査を実施したところ（回収 906 校、回収率 90.9%）、知的障害養護学校で約 35%が、自閉症または疑いがあると診断・判断された子どもたちでした。全国の盲・聾・養護学校の平均でも約 2 割が診断を受けた子どもたちで、疑いがあるとされた子どもたちは約 3 割でした。これらの子どもたちは、知的障害という状態に応じた教育課程の下で、個々のニーズに応じた指導を受け、一定の成果が得られてきました。しかし、自閉症の障害特性に応じた教育実践という観点からは、不十分であるという指摘も多くあります。

要するに、養護学校における自閉症のある児童生徒の割合は、とても高くなり、今までのように知的障害のみに対応した教育のやり方ではすまなくなってきたぞということが明らかになったのです。

(2) 「知的障害」と「自閉症」は違う

知的障害と自閉症の違いは何でしょうか。簡単に言ってしまうと以下ようになります。
知的障害：知的機能と適応行動（日常生活に必須の技術等です）に制約がある。バランスの取れた全体的な遅れ。

自閉症：症状論（社会性、コミュニケーション、こだわり、感覚過敏、等々）であり、普通の発達からの質的な違い。アンバランスな発達で、歪みとも言える。

つまり、大切なことは、「知的障害」と「自閉症」は別々に考えることです。

そうすると「知的障害」もあって、「自閉症」もある人の呼び方はどうすればいいの？ということになるかもしれません。その答えは、「知的発達の遅れを伴う自閉症」だと考えています。自閉症はそれだけ特性に十分配慮した教育や支援が必要な障害なのです。

(3) いろいろなタイプの人たちがいます。

一人一人の教育的ニーズに応じた適切な指導を目指すために、自閉症をイメージしやすく、誤解を解くためにも、押さえるべきおおよその枠が必要なかもしれません。例えば自閉症のある人の行動的な特徴を整理したローナ・ウィング女史によるタイプ分けが参考になるかもしれません。（以下の表参照）。

- ・孤立群：このタイプは、周りに他人が存在しないかのように振る舞う。自分の目的がある場合は、他人に対しての反応もある。「人を物のように扱う」とも見える。
- ・受動群：社会的にまったく孤立している訳ではない。人との接触も受け入れ、他人を避けはしないが、自発的に関わりを持つとはしない。
- ・積極・奇異群：他人との接触を活発に行うが、「普通の子のように自分と同年代の人に」ではなく、大人や世話をしてくれる人に対してのことが多い。とりわけ自分の要求や、自分の関心事を一方的に喋ることが多い。
- ・形式的な、大袈裟な群：表出言語が良好で、細部にこだわるなど、几帳面さが目立つ。合わせて、決まったことやルールはきつく守ることが多い。

自閉症というと、上記の表でいう「孤立群」をイメージしがちですが、その他にもタイプがあることの報告です。ただし、当然ですが、自閉症のある人も、一人ひとり個性があるということを忘れないでください。

(4) 支援者、先生に知っていただきたいこと ～自閉症の障害特性から～

研究成果や自閉症教育の充実に積極的に取り組んでいる学校に訪問した際に、聞き取り調査したことをもとに、「支援者、先生たちが知っておきたい自閉症教育における現状（到達点）と課題」を考えました。今回は、「自閉症の障害特性」のみを掲載します。

①中枢神経系の機能障害又は機能不全という認識がありますか。

日本自閉症協会が、会員を通じて全国 1450 人から回答を得た調査では、自閉症の原因について正しく理解していたのは全体の 60%、心の病 (23%)、遺伝 (5%)、親の育て方 (3%) と、誤った認識の人が全体の 30%を占めました。学校現場では、もう少し高い割合で中枢神経系の機能障害又は機能不全であることは共通理解されつつあります。その一方で「脳障害」であるから、状態の改善の見込みがないという誤解もあるようです。「自閉症は発達障害であり、中枢神経系の機能の障害を基盤にした発達過程の歪み（つまり、適切な方法に基づく教育により、状態が改善する可能性がある。）」という認識をもつようにすることが大切だと考えています。

②過敏性などの随伴することなどの理解はできていますか。

有名な三つの症状（社会性、コミュニケーション、こだわり）に加えて、よく理解しておかなければならない障害特性があります。例えば、過敏性などの感覚の問題、パニックなどの情動のコントロールの問題、二つ以上の情報を処理することが困難なシングル・フォーカスの問題、いろいろな情報をまとめて全体像をつかむ力が弱い（あるいは著しく興味がある）セントラル・コヒーレンスの問題などです（以下に詳しく述べます）。これらの障害特性を理解していれば、一度に二つも三つも指示を出したり、「耐性をつける」等の理由で見通しを示さないまま順番を待たせることを繰り返したり、わざわざ騒がしいところに連れて行ったりすることが、どんなに子どもたちの負担になるか理解できると思います。

④言語のみより、動作を伴った学習が有効 <聞くよりも、書いて学んだ方が良い>

課題学習などでは、手作りの教材教具を有効に使う、動作を伴った学習を進めている事例が見られるようになりました。自閉症のある人は、動作性の知能が優れていることが多く、言語のみよりイメージ化（映像として捉えて理解する）しやすいこともあって、書いて覚えたりするなど、動作を伴った学習を進めると能率が上がります。

⑤感覚的な記憶より、機械的な記憶をすることが多い <教えられことはちゃんと守る>

機械的な記憶が優れているということは、覚えたことはそのとおりに実行してくれることを意味します。言い換えると、できる限り正確に物事を教えなければなりません。誤った方法や大ざっぱな教え方をするとそのとおりに実行してしまうことにつながるのです。例えば自立課題学習などで課題を終えた後、終わりの箱に入れる際に、投げ入れるなどの状態であると、将来、作業を終えせっかく完成した製品を壊してしまうおそれがあります。せっかくできた作品ですから、丁寧に置く場所も指示してあげてください。

⑥聴覚的な情報処理より視覚的な情報処理が得意 <とにかく見るとよく理解できる>

最も知られている認知特性です。視覚的な情報処理が優れていることをフル活用して学習を進めることが有効です。構造化のアイデアなどはその典型と言えるでしょう。

⑦シングル・フォーカス、またはモノ・トラック <一度にできることは、一つです>

同時に二つ以上の事柄を意識内に捉えること(複数の情報の同時処理)ができないことで、一つの限局した部分に意識が集中してしまうことです。注意のコントロールがきかず、今、していることから意識の向きを他のことに変えることが困難なことに加え、自閉症のある人は、活動と興味の範囲の著しい限局性(こだわり)等が加わるため、指導者が予想しづらい木漏れ日や蛍光灯の光、空調機の音などに意識が集中してしまうことがあります。

⑧セントラル・コヒーレンス <どこが大切なの？ いつがんばって、いつ休むか教えて>

「中心的首尾一貫性」、または「中心性統合／統合的一貫性」などの訳語が出ています。「いろいろな情報をまとめて、全体像をつかむ力」のことで、自閉症のある人は、この力が弱いといわれています。通常は、入ってくる情報をその脈絡の中で処理して、細かい部分(記憶)は切り捨て、情報をまとめることが可能ですが、自閉症のある人にとっては、情報のどの部分が必要で、どの部分が不必要なのか判断が難しく、情報を捨てることができないことがあります。そのため、年齢の低い段階から、必要な部分と不必要な部分を判断する経験を積む必要があります。学校でスケジュールを確認する際には、今日一日のスケジュールの中でいつがんばって、いつ休むのかを主体的に確認させる必要があると考えています。

(5) 支援環境の整備について

①環境の構造化

構造化は自閉症支援のキーワードです。いつ、どこで、何を、どれだけするか、いつ終わるか、次に何があるのかを、見て分かるように示します。これが分かると、自閉症のある人は安心して、混乱することが少なくなり、パニックなども起こさなくてもすむことが多くなります。また構造化の種類には、場所の一对一対応などの「物理的構造化」、活動の流れなどの「スケジュールの構造化」、自立課題の課題数をはじめから提示しておくなどの「視覚的構造化」があります。

構造化は自閉症支援の基礎であると思ってください。また、構造化の取組は必要不可欠なものですが、常に変化するものです。構造化というキーワードの下で、支援者が様々な意見を持ち寄って、より良い支援方法を話し合う機会が増えることが期待されます。

②自立的に動くための支援

もう一つのキーワードとして、「自立的に」活動できるよう支援することがあります。「自分の力で主体的に行動する」ことは自閉症のある人の特性に合っていて、本人たちが希望していることであると考えています。

また、興奮してしまったり、パニックになってしまった時の、「クールダウン(情動のコントロール)」への対応や、学習や作業活動の合間に自立的な活動を入れて「モチベーショ

ン維持のためのごほうび」につなげることもあります。

③ 教材・教具の工夫

自閉症の特性に応じた教材・教具については、VOCAをはじめ、日本では無料ソフトの配布など先駆的な取組がなされてきました。世界的には、その視覚的優位性に着目して、コンピュータなどの機器をできる限り利用させようとする試みがなされています。儀式的行事や集会などの学習活動においてもスクリーンにプロジェクターからの写真やシンボル・文字を提示する実践も増えてきています。教室では、写真や絵が掲示等に広く用いられ、代替えのコミュニケーション手段として絵カードやVOCA (Voice Output Communication Aide) を使った支援が行われています。

他の教材・教具としては、時間の概念(始まりと終わり)を視覚的に示すもの(キッチンタイマー)が使われていましたが、設定した時間に対して2時間前より15分ごとに明かりが消えることで時間経過の認知を支援する「QHW(クォーターアワーウオッチ)」や、赤い扇形が減って残り時間を示す「Time Timer」なども活用されています。

(6) おわりに

我が国における特殊教育の研究成果が蓄積されつつあり、専門性の研修機会も大変多くなりました。また、情報のグローバル化により、インターネットから国内外の様々な情報を随時、取り寄せることができます。

例えば、今年の2月にノースカロライナ州立大学TEACCH部を訪問しましたが、予想より遙かに柔軟で、一人一人に応じた指導が行われていました。そこで改めて感心したことの一つに、「TEACCHプログラムの基本はIEP(個別教育プログラム)の徹底とトレーニングシステムの充実」ということがあります。日本でも、すでに数十年前から安田生命社会事業団(現明治安田こころの健康財団)などから発信されたIEPの実践が行われています。しかし、IEPの中味である授業や支援場面で利用できるアイディアはまだ不足しているのではないかと考えています。先のTEACCH部では、定期的に行われるトレーニングをとおして、現職研修を重ね、最新の指導技術や教材教具のアイディアを提供しているそうです。

一人ひとりのニーズに対応するためには、最新の情報を積極的に活用しなければなりません。一方、実践場面での応用や、我が国で培われてきた教育方法を活用しながら、情報の有機的な活用が必要になってきたと考えています。

そのためにも、この文章を、子どもたちを取り巻く様々な支援者と共有していただければ幸いです。私は保護者の方の教育相談をしたり、学校に出向いて先生たち向けの講演会や相談会をしたりしていますが、子どもたちのことを思う気持ちは皆一緒なんだなあと、確信しています。どんな時でも、ケンカしても、手を取り合ってがんばっていきましょう。

これからも、最新情報をお伝えすることができるよう、努力を重ねていきます。

参考文献) 全日本特別支援教育研究連盟機関誌「発達の遅れと教育 2005年6月号No.574」日本文化科学社